

本資料の性格について

佐藤虎男

I. 方言文法上の位置——「話部論」の一分野としての方言アスペクト——

方言アスペクトは、方言文の構造論的解明をめざす「話部論」において記述される事象である。藤原与一博士は、『日本語方言文法の研究』（昭和24年《1949》岩波書店）の第二篇話部論において、郷土語愛媛県大三島肥海方言のアスペクトに注目し、「用言的話部の叙述態」の名目のもとに、進行態・存在態を「---おる」・「---ておる」で言い分けるありさまを文本位に例証し、これに「---- ておく」式の言い方をも加えて記述された。その存在態（已然態・結果態にあたる）の、過去の存在態（落ちトックなど）のところで、「さう言ひ得るものと、言ひ得ないものがある。」として、「この差別は、もとの動詞の意義・性質に基づく。」とされ、動詞との強い関係に言及された。が、話部論であるから、単語論上の動詞についてはこれ以上は立ち入っておられない。

吉川武時氏は、「現代日本語動詞のアスペクトの研究」〈金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』所収〉に、アスペクト研究の初発段階に触れて、「……、『～している』が『～し』と『～て』と『～いる』とバラバラに説かれていては、アスペクトの概念は生じにくい。このようなバラバラなものとしてでなく、アスペクトという概念から現代日本語動詞の形式を説いたものに金田一春彦博士の『日本語動詞のテンスとアスペクト』（1955）がある。」と言われた。が、じつは方言文法の世界において、藤原博士は、早くにそれを「話部」という構造単位の中で記述する方法を提示しておられたのであった。ただ、上にも記したように、アスペクトの観点から見た動詞の分析そのものは示されていない。この分野に関する研究は、金田一博士に続く多くの優れた研究に委ねられるところとなった。以後の展開は、話部論の土俵上での動詞論ともいえるものであろうと、筆者は理解している。

本資料は、話部論の対象たる方言アスペクトを、用言の意義・性質の展開相として捉える見地から、関連事象にも配慮しつつ調査して得た資料である。

II. 日本全土の方言アスペクトの共時の状況

アスペクトに関する従来の研究の多くは、主に書きことば共通語で考えられていると言って過言ではないであろう。方言アスペクトを取り上げての研究も一方にはあるが、それらは、国立国語研究所の調査は別として、ある特定の地域方言に基づいた考察が主であって、全国状況を踏まえてのものは多いとは言えない。

本資料は、1993年から1994年にかけての、ほぼ日本全土にわたる、方言アスペクトの状況を、定められた場面設定・質問文言によって調べた結果得られたものである。今回の調査者は方言専攻者であり、その多くは国立国語研究所の調査経験者であって、その調査は質的に高いものとされるうえ、調査項目も、『方言文法全国地図』調査でのアスペクト項目にない多くの関連項目を盛り込んだ、全部で100項目という内容を持つものである。ここには、日本人のアスペクト表現の発想法の諸相、日本語アスペクトの素顔、素肌が出ているはずである。方言こそ、歴史を孕んだ日本語の現実態なのであるから、日本語の持つ可能性は、ここによく影現していると言ってよいであろう。共通語から方言を見る行き方とは別に、日本語方言共時態の土壤に立脚した自律的なアスペクト研究が、ここから起こることが期待されるのである。

ただし、調査地点を持たない県があちこちにあるなど、調査地点に偏りがあって、全国均一でない点は、残念というほかない。その点は、限られた項目ながらやがて刊行される『方言文法全国地図』が満足させてくれるであろう。が、現時点として、まがりなりにも全国規模で展望しうる確実豊富な資料を定着させたということは、歴史的な快挙と言ってよいのではなからうか。なおまた、中国語・インドネシア語のアスペクトまで視野に入れたその志向のほどは、高く評価されるであろう。いわんやこれらが調査費自弁の有志による、研究良心のみの献身的努力の結晶とあれば、一層その感を深くせざるをえない。

Ⅲ. 調査の企画・方法・記述上の問題点

〔1〕企画上の問題点

山口幸洋氏が「静岡県榛原郡中川根方言のアスペクト」の末尾に寄せられた「方言文法とくにテンス・アスペクトに関わる言語調査のあり方について」に、企画上の問題点が鋭く指摘されている。要点は次の二点である。

- (1)「今回の調査企画に、調査表段階で東日本の『ツケ』周辺の事実を積極的に収録しようという姿勢に欠けているのは残念なことだった。この事は、日本語方言のテンス・アスペクトに関する根本的な認識の問題と思われる。」
- (2)「文法の調査では、ペーパーテスト的な調査方式とて、私はそれを否定するものではないが、それに加えて自然談話資料をこそ重視すべきであると主張したい。」

言われるとおりであって、特に(1)は、立案に当たったものとして責任を感じている。今回この調査の計画立案をするときに、調査担当者にできるだけ広く、予め意見を求める手順を踏むべきであった。。

(2)のことも全く同感で、だからこそ今回の「調査要綱」の「3. 立案の基本方針」の(1)にも、「統一のための場面設定による質問調査を核とするが、自然語観察を大いに尊重する。」と述べたのもあった。

〔2〕方法上の問題点

その地の方言アスペクトの体系といえるものを狙うという要綱に従えば、どういう話者を何人選ぶかということは、調査者の判断によることである。単に所与の調査票に従って一人の話者について調査した結果を、そのまま報告するという行き方ではなく、まずそこで「すべて」が正確に捉えられているかどうかについての調査者の判断が尊重されている。それが一人で果たされるような、その地の代表的話者であるなら、それで記述は充足するはずである。

ここにまた、沖裕子氏（長野県松本市担当）の「総括」（まとめ）での、傾聴すべき問題提起がある。一つには、調査を尽くそうとして別の場面を用いて尋ね直したりすると、「統一調査票」の意義が失われるおそれがある。二つには、こうした文法形式の調査においては、場面を離れれば離れるほど、自然な使用例から離れて、「使用するか否か」から「使用する可能性があるか否か」の方向へ行き、その境界は曖昧なため、知らないうちに話者に文法性の高度な判断を求めることにもなる。共通語と近い体系・語形を持つ方言において特にそうなりやすい。以上の2点である。

たしかにそういうおそれがあるが、それを乗り越えることはできないであろうか。乗り越える道の一つは、選ばれた複数の話者について、できるだけ場面どおりの質問を無理なくして、自然性を損なわないように調査することであろう。パロール即ラングの言語研究の道がそこにある、と筆者は理解しているが、いかがであろうか。

実際には、多くの調査者が、複数の話者について調査している。それも、年層差を見ようと意図した調査をしている。この点からすれば、本資料は、今日のアスペクト表現法の年層差、したがってその動態を窺うことの可能な資料とも見ることができ、**「統一」**の実は、必ずしも完璧というわけにいかない。

〔3〕記述上の問題点

解説のしかた、文例の出し方などもさまざまである。文例を豊富に付けて解説した地点もあれば、その簡潔な地点もある。全項目を通して、文例本位が望ましいのは言うまでもないが、なにぶん多くの項目なので、紙幅の都合上、やむをえず該当部分にスポットを当てた記述方式をとらざるをえなかった。

ここでも統一の実は、調査項目ごとの表示という一点だけにとどまっているが、下記するように、これだけで分布図が描けるというのは、この統一のおかげである。その他のことはむしろ調査者の個性に関わる問題で、不揃いなのが当然と、積極的に評価すべきものではないか。事実、それぞれの論文末尾に寄せられた「総括（まとめ）」は、じつに個人的で興味深く、示唆・教示に富むものである。ご通読をお勧めしたい。

ほかにもいろいろの問題点があると思うが、にもかかわらず、ともかくこれだけ多くの力が注がれたということに、深い敬意を禁じえない。

IV. この情報を分布図にして

【その1】

『方言文法全国地図』（国立国語研究所1989～）のための本調査では、下記の6項目が取り上げられた。やがてその分布図が公刊されると聞く。

231「散る」の進行態 / 232「散る」の結果態 / 233「散る」の将然態

234「死ぬ」の将然態 / 235「落ちる」の将然態 / 236「有る」の進行態

周知のとおり、その準備調査の段階では、この他に、「(雨が)降る」や「(火が)消える」などの場面における将然態・結果態などの項目があって、その調査結果をまとめた分布図集がすでに刊行されている。(国立国語研究所『表現法の全国的調査研究—準備調査の結果による分布の概観—』1979)

たとえば、その中の1葉「花が散っている」(進行態)の分布図を、本資料の中の項目19「(今現に)散っている」の資料によって試作した分布図と対比してみると、チッテル・チットル・チッコル・チリヨルなどの分布様相にほとんど変わりのないことが知られるとともに、前図の和歌山県に見られたチリヤル(動詞「ある」に由来する)が、今回のには姿を見せていないことに気づく。

ともかくここに、このような分布の動と不動とを看取することができる。

【その2】

たとえば「桜が散りそうだ」の分布図を、本資料の項目17「(今にも桜が)散りそうだ」の試作分布図と見比べてみる。凡例はつぎのようである。以下、配符は省略する。

○国語研究所の準備調査結果の分布図の凡例

下の試作図には見えなくなった事象には下線を施して示す。

チリソーダなど(チリソージャ、チリソーヤ、チリソーナ、チリサーナ、チリソー
ヲ、チリソゲラ)

チリヨル(チロル)

チリカケル(チリニカカッテル、チリカケトル、チリカケヨル、チリカカッタル、
チリカケタール)

チローゴタル(チルゴッショル、チルゴタール)

チルヨク(チルエンタ、チルンタ、チレンダ、チルヨーダ)

チロデシヨル(チロテシヨル、チロジスイ、チロシトル)

その他(チルトコロダ、チッチャウ、チル、チットル)

○本資料の項目17によって試作した分布図凡例

※印は上の国研分布図に見えなかったものを示す。

チリヨル(チリョール) <奈良・広島・山口>

チロデシヨル (チロデッシヨル) <福岡・熊本>

※チローカシヨル<福岡>

チッテシマヨール<広島>

チリソーダ (チリソージャ・チリソーヤ・チリソーナ・チリーナ)

※チロソンシチヨル《散るそうにしておる》<長崎>

※チリソーナフージャ<宮崎>

チッチャイソーダ<群馬・愛知>

チリソゲラ (チリサーゲナ・チーサゲナ) 《～げだ》<新潟・鳥取・島根>

チルヨーナ (チーヤナ・チルエンタ・チルンタ) <青森・島根・岡山>

チルゴタル《～ごとある》<宮崎>

※チツテク (チツチク・チツテクル) 《～ていく・てくる》<石川・三重>

チリカケテル (チリカカッテル)

チリカケトル (チリカカットル)

チリカケチヨル (チリカカッチヨル)

— } <京都・和歌山・島根・愛媛>

※ウティギサイ《ウティは「落ち」、ギサイは「げさあり」とある》<与論島>

※ウティガタヤン《ガタは「方」であろう》<沖縄伊江島>

チルドコダ (ツットゴダ) 《～ところだ》<青森・岩手>

チッチャウ・ナーナッテシマウ《～てしまう》<長野・広島>

イマニモチル (チル・ナーナル) <石川・広島・福岡・長崎>

両図有無あい通じて、将然態の発想法の諸相が展望される。どちらかということ、国研の分布図では () 内の音声変種に該当するものが多く、下の試作図の方では一段目二段目の事象に該当するものが多い。一段目二段目事象とは、発想法上の種別を表そうとしたものである。

【その3】

以下には本資料にしかないものを扱う。まず項目46「(私はあの先生が)好きだ」の分布図を見る。形容動詞「好きだ」はアスペクト表現になじまないものであるが、これに対応する言い方に「好いておる」式のものがある。そこにアスペクトが関与している。

凡例は下記のとおりである。

好きだ [スギダ・スキラ・スキヤ・スッキヤ・スキジャ・スキジョ・スコジヨ・スキヨー・スイチャー]

好いておる [スイトル・シートル・スイチヨル・シーチヨル・スイチュー]

好いた [シート]

この「好いておる」式の言い方の顕著なのは、九州地方である。近畿以東は「好きだ」式が一般である。そして、中国四国地方は、「好いておる」式と「好きだ」式との重なり分布を示す。東方「が好きだ」式が西方「を好く」式を侵攻するさまが看取される。

【その4】

項目48「(今、運動会が)ある」を取り上げてみる。方言によっては「ある」を動作動詞のように表現することは、よく知られていよう。

凡例は次のとおりである。

アル

※アリオル

※アリオル(アリオール・アリオル・アリュウ・アユイ)

ヤリオル(ヤッリオル・ヤリュウ)

シヨル(シヨール)

※アッチョル

ヤッチョル

シチョル

ハジマッチョル(ハジマッチュー)

ヤットル(ヤットー)

シトル

ヤッテル(ヤッテイロ・ヤテシタ)

シテル

シッタツケ

サイチュー(マッサイチュー)

マッサカリダ(サカンド)

シーアイチュン

「ある」動詞を使つての aspekts 的表現(※印のもの)は、中国四国九州などの、近畿を除く西日本に認められる。ともかく日本語は、「ある」を aspekts 的に表現することを可能にする言語である。

【その5】

単純状態を表す動詞「違う」の関わる項目67「(昔と)違っている」および項目68「(昔は今のと)違っていた」に注目する。音便部分の違いは見ないで分類すると、次のような凡例になる。

○項目67「(昔と)違っている」の凡例

チガッテル(ツガッテル・チガッテイロ・チガッテル・チゴートル・チゴテル・カワッテル)

チゴートル(チゴトル・チガットル・チガットー・チゴータユイ・ハワティウウン
チゴーチョル(チガッチョル・チガッチョー・チゴチョル・チゴーチュー・チゴチ
ョッ・チゴータユイ)

チゴチャール<和歌山のみ>

チガウ (チャウ・チガー)

○項目68「(昔は今のと)違っていた」の凡例

チガッテタ (チガッテダ・チゴータタ・チゴテタ) <主に関東地方>

チガッテイケ<東京都利島>

チゴートツタ (チゴトツタ・チガットツタ・チゴートウタン・ハワティウウタン)

チゴーチョッタ (チゴチョッタ・チガッチョッタ) (かゝって)

チガッテアッタ (チゴチャータタ・ツガッテラ) <青森・岩手・和歌山>

チガッタツケ<山形>

チャウカッタ<大阪>

チガッタ (チゴータ・チャッタ)

チゴテル

チゴートル

チゴーチオル

チゴタル

チガウ

項目67には、結果態のテイル・テオル・テアル各形式の活躍がある。動詞ル形の「チガウ・チャウ」などはごく僅かにしか認められない。あたかも、「似ている」とはよく言うが、「似る」という動詞ル形ではあまり言わないのと似ている。一方、項目68でも、テイタ・テオッタ・テアッタなどのタ形の3形式の活躍があるから、要するに、単純状態を表す動詞はテイルなどのアスペクト表現をとりやすいということなのであろう。

なお、項目68ではこのほかに、「テイケ」「タツケ」などケ形のものがあり、またチャウカッタのような自在な混合形も新生して、比較的多彩である。しかも、タ形をとらないル形のアスペクト形式チゴテル・チゴートル・チゴーチオル・チゴタルも顔を揃えているのである。「昔は今と比べて」という文脈においても、ル形アスペクトがより有力に働くのは、やはり「違う」という単純状態動詞に起因するのであろう。

【その6】

項目100は、話しことばでなく書きことば「～つつある」の意味を質問したものである。その(1)「雨が降りつつある」の試作分布図によれば、「降り始めた状態」と「降っている最中」とがあい半ばしている。(併存のところもある。)しかも、全体として顕著な分布領域は認めがたく、全国いづこもおおよそ似たような状況を呈している。

この回答をした話者の大半は高年・壮年層であるが、対する青年層では、「降りそうな状態」とするケースが多くなっているようである。

じつは、今回の調査とは別に、筆者が学生240名を対象に調査したところでは、成育地不問の全体平均値が、「降りそうな状態」とするもの約30%、「降り始めた状態」

とするもの60%強、「降っている最中」の回答は10%弱なのである。おそらく地域差よりも年層差のせいであろうが、ではなぜそんな違いが生まれてきたのかということになると、説明は簡単でない。学生対象の別調査において同時に実施した「(金魚が)死につつある」の調査項目では、「死にそうな状態」が断然多くなって55%、「まさに死ぬ寸前の状態」が43%で、「死んでしまって浮いている状態」とするものは皆無に等しいという結果になっている。このことからしても、「～つつある」自体の意味が一律に移動しているのではなく、動詞の性質にもよることが明らかであるが、同一の動詞の「降りつつある」の場合についてみても、いまや高年層と青年層とにかなりの違いができてきていることは、おもしろいことである。

話しことばのみならず書きことばの世界にも、このような変化が生まれ「つつある」ことが分かる。

【その7】

分布図にしなから思う。単なる事象の羅列にとどまらない、くわしい解説が施されていることが、いかにも有効である。方言地理学的な側面と記述的側面とを併せ持っていることが、本資料を興味津々たるものにしてている。

調査地点が全国均等にいきわたっていないから、まったく概括的にしか言うことができないが、総じて、東日本は分布模様が比較的単純であるのに対して、西日本はそれが比較的複雑である。

また、進行・結果の二態一元の表現法の西漸が傾向として認められるように思う。

アスペクトによらない他の表現法、補助的(共起的)要素による表現法などに、今後細心の注意を払っていく必要がある。

V. もし再度企画するならば

- (1) 話者条件の統一。高年層・中年層・若年層ごとに男女1名ずつ、など。
- (2) 場面設定に用いる動詞(広く用言)を、アスペクトの観点から十分に吟味して、必要にして最小限のものを漏れなくとりあげる。
- (3) 敬語との関連をもっと重んじる。「ていりゃーす」「ておいでる」「てはる」「てござる」「てなさる」「てみえる」などは、要するに「ている」の敬語的表現である。人を話題にしての対話表現では、この種のアスペクト表現が出やすいのであるから。
- (4) 記述のしかたについて。紙幅の制限を緩和して、各項目ごとの解説記事を存分にお願ひし、さらに「総括(まとめ)」の記事の内容に、テーマを設定して統一を持たせる。
①その方言のアスペクトの体系(進行・結果二態一元か否か) ②共通語アスペクトと対比しての特徴 ③年層差 など。
- (5) 事前に、調査予定者に、企画内容についての意見をできるだけ広く徴する。

〔あとがき〕

私のアスペクト・テンスに関する勉強は至って不行届きです。文中にすでに掲げた文献以外には、主に下記のような文献を参照させていただきました。記して感謝いたします。

- 明治書院「日本語学」1982年12月号特集「動詞・助動詞の問題点——テンス・アスペクト——」
- 寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版1984
- 奥田靖雄『ことばの研究・序説』むぎ書房1984
- 国立国語研究所『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版1985
- 至文堂「国文学解釈と鑑賞」昭和六十一年1月号特集＝日本語動詞のすべて1986
- 小泉保・船城道雄・本田晶治・仁田義雄・塚本秀樹編『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店1991
- 益岡隆志・田窪行則『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版1992
- 森山卓郎「アスペクトの意味の決まり方について」（「日本語学」1984 Vol.3）

なお、この資料の製作に関わった有志の方々に改めて深い敬意を捧げますとともに、この資料が広く深く活用されることを念願せずにはられません。